復活節第６主日礼拝説教「ふさわしくないからふさわしい」
日本基督教団石神井教会　2019年5月26日

【旧約聖書日課】ダニエル書　6章10～23節

10ダレイオス王は、その書面に署名して禁令を発布した。11ダニエルは王が禁令に署名したことを知っていたが、家に帰るといつものとおり二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげた。12役人たちはやって来て、ダニエルがその神に祈り求めているのを見届け、13王の前に進み出、禁令を引き合いに出してこう言った。「王様、向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願い事をする者があれば、獅子の洞窟に投げ込まれるという勅令に署名をなさったのではございませんか。」王は答えた。「そのとおりだ。メディアとペルシアの法律は廃棄されることはない。」14彼らは王に言った。「王様、ユダヤからの捕囚の一人ダニエルは、あなたさまをも、署名なさったその禁令をも無視して、日に三度祈りをささげています。」15王はこれを聞いてたいそう悩み、なんとかダニエルを助ける方法はないものかと心を砕き、救おうとして日の暮れるまで努力した。16役人たちは王のもとに来て言った。「王様、ご存じのとおり、メディアとペルシアの法律によれば、王による勅令や禁令は一切変更してはならないことになっております。」17それで王は命令を下し、ダニエルは獅子の洞窟に投げ込まれることになって引き出された。王は彼に言った。「お前がいつも拝んでいる神がお前を救ってくださるように。」18一つの石が洞窟の入り口に置かれ、王は自分の印と貴族たちの印で封をし、ダニエルに対する処置に変更がないようにした。

19王は宮殿に帰ったが、その夜は食を断ち、側女も近寄らせず、眠れずに過ごし、20夜が明けるやいなや、急いで獅子の洞窟へ行った。21洞窟に近づくと、王は不安に満ちた声をあげて、ダニエルに呼びかけた。「ダニエル、ダニエル、生ける神の僕よ、お前がいつも拝んでいる神は、獅子からお前を救い出す力があったか。」22ダニエルは王に答えた。「王様がとこしえまでも生き永らえられますように。23神様が天使を送って獅子の口を閉ざしてくださいましたので、わたしはなんの危害も受けませんでした。神様に対するわたしの無実が認められたのです。そして王様、あなたさまに対しても、背いたことはございません。」

【使徒書日課】テサロニケの信徒への手紙二　3章1～5節

1終わりに、兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。主の言葉が、あなたがたのところでそうであったように、速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように、2また、わたしたちが道に外れた悪人どもから逃れられるように、と祈ってください。すべての人に、信仰があるわけではないのです。3しかし、主は真実な方です。必ずあなたがたを強め、悪い者から守ってくださいます。4そして、わたしたちが命令することを、あなたがたは現に実行しており、また、これからもきっと実行してくれることと、主によって確信しています。5どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるように。

【福音書日課】ルカによる福音書　7章1～10節

1イエスは、民衆にこれらの言葉をすべて話し終えてから、カファルナウムに
入られた。2ところで、ある百人隊長に重んじられている部下が、病気で死にか
かっていた。3イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いに
やって、部下を助けに来てくださるように頼んだ。4長老たちはイエスのもとに
来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。5
わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」6そこで、イ
エスは一緒に出かけられた。ところが、その家からほど遠からぬ所まで来たとき、
百人隊長は友達を使いにやって言わせた。「主よ、御足労には及びません。わた
しはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。7ですか
ら、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思いました。ひと言おっ
しゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。8わたしも権威の
下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言え
ば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』
と言えば、そのとおりにします。」9イエスはこれを聞いて感心し、従っていた
群衆の方を振り向いて言われた。「言っておくが、イスラエルの中でさえ、わた
しはこれほどの信仰を見たことがない。」10使いに行った人たちが家に帰ってみ
ると、その部下は元気になっていた。

「ふさわしい人です」

教会暦は今週の木曜日に「昇天日」を迎えます。主のご復活を祝ったイースター（復活日）と、それから七週間後の聖霊降臨を祝うペンテコステ（聖霊降臨日）の途中に位置する「昇天日」は、主イエスがご復活の後に四十日を弟子たちと共にお過ごしになられてから天に昇られたことを記念する日です。ペンテコステの祝いへと入っていく前の最後の号砲、と言ったらよいかもしれません。

クリスマスやイースターの祝いでは、皆さんが誘い合って礼拝へと集って来てくださいます。信者ではない家族や知人をお連れくださる方も少なくありません。ペンテコステにも、同じように誘い合って、信者ではない方をお連れになって、礼拝へと集っていただきたいと願っています。大勢ではなくてよいのです。一人が一人を誘うなりお連れするなりしてくださったらよい。もちろん、特別な祝いのときに限ったことではありません。いつでもそうしていただきたいのです。皆さんが心に留めてくださる一人を、キリストのもとにお連れいただきたいのです。

信仰は、もちろん一人ひとりのことです。周りがどう願おうと、本人次第のことです。けれども、だからと言って、わたしたちは、家族や親しい者の信仰はどうでもよい、勝手によろしくやってくれ、とは思わないでしょう。その人の日々の生活が順調であろうと、困難の中にあろうと、わたしたちの信じる一人のお方との関係を土台にして生きてほしいと、願っているはずです。愛する者のことを「あの人は、主イエスに助けていただくのにふさわしい人」と思わない理由が、どこにあるのでしょうか。

「ふさわしくないと思いました」

実のところ、いささか残念なことですが、わたしたちの目には、無意識のうちにフィルターがかかっているようなのです。「あの人にはぜひ教会に来てほしい」とか「この人にはきっと信仰のことがわかる」などと思いを込めることがある一方で、「あの人は教会にふさわしくない」とか「この人には信仰のことがわからないだろう」などと勝手に決めつけてしまっていることも少なくないのです。

福音書日課（ルカ７章）の物語では、一人の百人隊長が、ユダヤ人の長老たちによって「あの方は、主イエスにたすけていただくのにふさわしい人です」と紹介されていました。百人隊長という地位は、ローマ皇帝に忠誠を誓った軍隊の中でも非常に名誉ある職だったようです。しかし、ユダヤ人から見ると、神ならぬ皇帝に仕えている異邦人の代表のような存在でしたから、通常であればあまり付き合いたいとも思わない相手であったはずです。そのような人物の願いを聞き、一人のユダヤ人との間を取り持つということを長老たちがしたというのは、異例のことだったかもしれませんが、そうしたのには理由がありました。その百人隊長とその地のユダヤ人たちとの間には、個人的な関りを持つ交流があったのです。その百人隊長は、その町でユダヤ人たちが新しく会堂を建てるというときに「**自ら…建ててくれた**」と、長老たちは紹介しています。資金を出してくれたとか、資材や人材を融通してくれた、ということかもしれません。いずれにしても、ユダヤ人たちにとっては、恩義のある人物でもあったのです。もしかすると、部下が病気で苦しんでいるというときに、病気癒しなどで評判となっていた主イエスのことを百人隊長の耳に入れたのも、付き合いのあったユダヤ人たちの積極的な行動によることだったのではないでしょうか。

そう考えると、百人隊長のもとに向かわれた主イエスに対して、あらためて使いを通して百人隊長が「**御足労には及びません**」と遠慮した理由も、分るような気がいたします。ユダヤ人の長老たちに勧められたので主イエスにおいでいただこうとしましたが、実際には付き合いのある相手でもないし、しかも、もしかすると自分のことを忌み嫌っているかもしれない相手なのです。百人隊長という権威や権力を傘に着て無理やり来させようとしていると思われたならば不本意だと、彼が考えたとしても不思議ではありません。それにしても、ずいぶん遠慮したものです。自分の家にお迎えするができるような者でもないし、出向いて行って面会を願うことさえ自分にはふさわしくない、というのです。

わたしたちの周囲の人たちの中にも、そのような思いでキリストに近づくことができずにいる人たちがあるのではないでしょうか。「自分は教会にはふさわしくない」と、自ら敷居を高くしてしまっている人たちが少なくないのではないでしょうか。そのような人たちの「自分はふさわしくない」という態度を真に受けて、忖度して、わたしたちは、その人にキリストを紹介することも、その人を教会にお連れすることも、しないで済ませてきたのではないでしょうか。

しかし、ユダヤ人の長老たちは行動を起こしました。主イエスもそれに応えて彼のもとに向かいました。しないで済ませることにはしなかったのです。

「これほどの信仰！」

「**ひと言おっしゃってください**」。それが、百人隊長の主イエスに対して願ったことでした。とは言え、彼がそう願ったのは、わたしたちが祈りのうちに「御言葉をください」と願うのと同じことではなかったでしょう。彼は軍人でしたから、上官の命ずる言葉が部下に対して絶対の権威をもって告げられる、という世界に生きていました。「言葉をいただく」ということ自体が、そういう重みを帯びたことだったはずです。イエスという評判の人が何者であるかを十分に知らなくても、その方の「言葉」をいただけば、その人の権威がいかばかりのものか判断がつくと考えているところもあったでしょう。

実のところ、牧師にもさまざまな場面で「ひと言」が求められることがあります。牧師の役割を果たすためであれば、もちろん、その求めに応じて口を開きますが、そうとも言えないこともあるのです。そのようなとき、喜んで「ひと言」どころか長舌を振るう者もありますが、わたしはできるだけ自重するようにしています。その場にふさわしい「ひと言」を繰り出す自信もありませんし、わたしという人間の底が知れてしまうことになるに違いないからです。

ところで、福音書日課の伝える物語で、主イエスは「ひと言」を百人隊長に届けたのでしょうか。確かに、彼の伝言を聞いた後、主イエスは、後について来ていた群衆に向かって振り向きざま、告げられました、「**言っておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない**」と。でも、これは、百人隊長に求められて返した「ひと言」ではなかったでしょう。主イエスは、百人隊長のために、「安心しなさい」とか、「あなたの信仰があなたの部下の病気をいやす」とかといった「ひと言」を託すこともできたのでしょうに、そうされなかったのです。少なくとも、福音書は、そのような「ひと言」があったとは物語らないのです。その代わりに、それでも百人隊長の部下の病はいやされていた、と福音書は物語っているのです。

そのいやしが起こるところを御覧になられて、主イエスは「これほどの信仰」とおっしゃられたのではないでしょうか。百人隊長とその部下との間には、ただの軍人としての規律を守ることだけでなく、病気の部下のことを慮る信頼関係がありました。うっかりすると対立しがちなユダヤ人の人たちとの間にも交流があり、互いに信頼関係を築いていました。彼のためにならば動いてくれる長老たちや友達がいました。彼は、「百人隊長」としてではなく、一人の人間として、周囲の人と信頼関係を築く生き方をしてきていたのです。主イエスがご覧になられたという「信仰（＝ピスティス）」とは、その「信頼関係／誠実な関係（＝ピスティス）」のことだったのではないでしょうか。

愛する皆さん。「自分はふさわしくない」と謙りましょう。しかし、「あなたはふさわしい」と告げてくれる者の言葉は、受け入れてください。そこに「信頼」が生まれます。そこから、「あなたは神の子にふさわしい」とお告げくださる神との信頼関係、信仰が始まります。そこに、主はおいでくださっています。そこでこそ、わたしたちの中で失われかけた一人は、いやされ、救われるのです。